

第14回国際疫学学会を終えて

青木 國雄*

Key words : 疫学, 国際学会, 名古屋, 学術発表, 衛生会議, 学会の意義

第14回国際疫学学会 (14th ISM) は1996年8月27日～30日の4日間、名古屋で開催され、65ヵ国の国々からの登録があり、充実した内容と国際親善の成果をあげて終了した。登録者882人うち日本人420人、外国人462人で外国人が日本人より多かったのも特徴である。外国人は欧州97人、アジア90人、南米アメリカ54人、中近東・アフリカ32人、オセアニア98人であったが、残念なことに数か国の学者が直前に参加不能となった。結果として参加者は外国人、日本人、ほぼ同数となり、実際に参加した国の数は55となった。同時に6つのSatellite Meetingsと教育・研究を合わせもった。これらの参加者は本学会登録者以外に300人を越し、また学会開催について貢献のあった者で疫学に関心のある65人の日本人学者が招待された。運営に強力したボランティア168人の過半は医学医療関係者であったので、本学会参加実人員は一時的には1,000人をこす状況となった。

本学会のテーマは“変貌する環境と全地球的健康”をかかげた。これは最近の激しい疾病構造の変化に効率的な対応が必要と考えたためであり、また長年かかって築いた先進的国々の住民の健康も局地的戦争や災害(自然ならび人工的)があると、もろくも短時間で破壊していくので、そうしたこともふまえた研究、対策(計画)も重要と考えたからである。学術発表のメインイベントは基調講演2、特別講演18、シンポジウム5で、これを主軸にパネルディスカッションと夜間集会の円卓討議を設定し、世界各地からの参加者に参加討議を要請した。

開会式では会長(青木國雄)から本学会の特徴

と疫学会の在り方、また重松逸造名誉会長から日本の疫学の歴史と本学会の意義が述べられた。基調講演はWHO中島宏事務総長の“21世紀の健康と疫学的展望”、Sir Richard Doll(Oxford大学名誉教授)の“Weak associations in epidemiology: importance, detection and interpretation”、特別講演は電離放射線の地域的管理、ロシアの母子健康(特に政変時)、生殖疫学、がん化学予防、喘息、病の精神心理要因、世界のAIDS対策、結核、熱帯病、WHO・MONICA計画、心疾患、老化、行動医学、疫学教育、疫学と倫理、日本の難病、栄養とがん、がんの分子疫学と多岐にわたり、世界の権威から新知見が発表された。シンポジウムはAIDS/HIV感染、地球気象変化と健康、がんの民族差、心血管疾患の疫学、女性の健康であった。パネルディスカッションは自然および人工災害、AIDS、老年病、心疾患予防、世界の感染症、精神心理と病、健康対策、肝炎と肝癌、薬剤疫学、大気汚染、健康情報システムで、円卓討議としては疫学方法論、公衆衛生教育、職業と健康、アジアのAIDS、途上国のプライマリケアと伝統医学、また自由集会で禁煙と健康が討議された。一般演題は口演94、示説283で、この発表時間には他の催しものはまったくなくしたので全員の参加と討議が可能となった。特に示説会場は多数の参加者であふれ、関心が高かった。日本特有の疫学研究(SMON、イタイイタイ病、水俣病、川崎病など)保健行政対策などの特別展示も外国人の目をひいた。

衛生会議は日本がん疫学研究会との共催シンポジウムの他、ハンセン病公開シンポジウム、UICCとの共催の食生活と栄養とがん、がんの分子疫学、およびWHOとの共催の環境と疫学の5つが催された。その他、WHOのInternet(Gene-net)展示、子供向け環境と健康があり関心を集めた。前の週には大阪で日英共催の疫学 training

* 第14回国際疫学学会会長・愛知県がんセンター名誉総長
連絡先: 〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知がんセンター 青木國雄

courseがあり14人の外国人が招待され、広島ではChernobyl accident 10年後の放射能と健康のシンポジウムが行われた。

学会準備は必ずしも順調にはいかなかった。会員から寄せられた要望の中で①学術プログラムはInternationalで、できるだけ世界中の人材をmain speakerに登場させること、女性のspeakerの数を増やすこと、②経済的に学会出席が困難な地域の学者にできるだけ多くのScholarshipを用意すること、③演題を提出しても欠席する人を極力減らすこと、などがありなかなかの難題であった。この解決のために国際プログラム委員会をロンドンで開いた。より安価に開催できるロンドンを選び、IEAの理事の代表、欧米の各界の著名な疫学者を招請して、きたんのない意見を求めた。これは大きな成果があった。これら意見をもとに日本で組織委員会が学術プログラム原案をつくり、日本全国の組織委員の意見を求めて改変した。人選は旅費の確保がかなり遅れ、最終的な案が決まったのは6月末であった。

Scholarshipは応募者が200人に及んだので、選考委員をつくり、3人前後の委員がAbstractを評価し、1～5点のScoringをし、得点の多い順に並べ、国別、地域別に高・中・低得点の3区をした。その中から年齢の若い者、国情を参考として120人を選び、高得点は最も廉価な往復旅費、中得点は片道の旅費、低得点も含め登録料・滞在費を負担することにした。数名の辞退者があった。

Scholarship受賞者の中、ビザの取得や自国でのgrant申請の遅れなどで10人以上が来日できなくなったのは残念であった。

学会運営については幸い文部省から科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表(C)」のGrantを1995、1996年両年度にわたることができ、基礎資金を得たことは有難かった。それで一般募金はScholarshipと世界の疫学の権威の招へい費を重点にすすめることができた。地元財界、経団連、製薬業界などのご厚意や医学財団の支援をうけ、また友人、知己からの個

人献金を得て、充実したプログラムをつくることができた。

日本疫学会の全面的なバックアップと168人の医療、非医療のボランティアの参加があったので、資金の乏しいこの学会も極めて円滑にすすめることができた。

学会当日の欠席者を少なくするため、2～3ヵ月前より再度出席の可否、登録料の支払を請求をして確認をとった。これにより当日の欠席は極めて少なくなった。本学会開催の意義としては

1. 世界の疫学研究、保健対策の情報交換に大きく貢献した。
2. 日本の疫学研究の推進に役立った。特に若い疫学者の国際化に目を開かせた。
3. Scholarshipを含め経済的に問題のあった国々から140人以上の学者が参加でき、各地域のあまり知られていなかった保健情勢が明らかとなった。
4. 日本の疫学研究の実態、歴史を単行書、示説で示し、日本の理解に役立てた。
5. WHOとの共同のシンポジウムやインターネットの利用による疫学情報の交換は強い関心を集めた。日本がん疫学研究会、UICC、らい学会などとの共催のシンポジウムはきわめて効率的であった。
6. 新しい国際疫学学会のパターンをつくった。
7. 少なくとも55か国の学者の学術、ならびに交友の場をつくり国際親善に大きく貢献した。

最後になるが関係各位の努力と奉仕なくしてはできなかった学会といえる。終了後に極めて高い内容の評価が参加者からよせられたのはこうした背景があったからと思う。運営に携わったスタッフの心情が学会参加者の胸をうったものと思われる。人の心という、かえがたい宝を得た本学会を本当に誇りに思っている。

(受付 '96. 9.30)